

XI. 信徒と教職の宣教協力

1. **新約聖書に見る「教職と信徒」の関係**:①新約聖書中この二者の区別は明確でないが、自分の職業を捨てて巡回伝道に当たるグループと、運動を支援するグループに自然に二分されており、その流れが「職制」に引き継がれた。双方同じ神の民であるが、違いがあるとすれば、職務の違いであり、上下関係ではない。宣教への派遣は全てのキリスト者に向けられており、この面で信徒と教職の協力が必要である。
2. **初代教会の指導層**:初代教会の指導層は①使徒:主の直接の弟子で、主の言動と復活の目撃し、直接使命を与えられた人々;②長老:ユダヤ社会の長老(高年齢で、経験を積み、尊敬された者達)がキリスト教会に導入(使徒 14:23);③監督:ローマ社会の監督(宗教・司法・行政の責任者)がキリスト教会に導入。長老と同義語、或いは、長老団の議長格(テトス 1:7);④執事:テーブルに仕える者(使徒 6:6)、後に監督に次ぐ役職へ(ピリピ 1:1)。職制上の区別と共に、賜物の違いも意識されていた(1ペテロ 4:10)。「分業と一致」は、人体における諸器官の譬えで説明される(ローマ 12:4,5)。これ等の異なる賜物は協力して、キリストの体を建て上げる為に用いられる(エペソ 4:16)。蛇足：**宣教における「教職と信徒」の協力**:①ピリピ書に見る「教職と信徒」の宣教協力:ピリピ信徒が「最初の日から今日まで、福音を伝える事に共に携わってきた(コイノーネオー=重荷を共に担ぐ)」(5節)事を感謝している。「神の選びと派遣は本来全てのキリスト者に向けられているのであり、従って神から与えられた宣教の務めもまた、第一には専ら教職の務めとしてではなく、神の民としてのキリスト者共同体(教会)の全体に神から委託された務めとして理解され、受けとられる事が正しい。宣教の務めの担当と遂行は、牧師と信徒との共同の責任として第一に考えられる事の方が寧ろ新約聖書の精神に相応しいのではなかろうか」(森野善右衛門、1980:「他者の為の教会」)と、信徒と教職の協力の意義を説く。
3. **教会史に見る職制**:カトリック教会の確立によって職制が固定化され、教職(司祭)と信徒との区別は、越えがたい淵になってしまった。プロテスタントが「万人祭司主義」(全ての信仰者は自分にとって祭司であり、他人の仲介なしに直接神に近づく事が出来るという考え方)を掲げたのは、カトリックの司祭中心主義への反動である。しかし、宗教改革を経た教会でも、未だに「アマの信徒・プロの教職」という区別意識が残っている。これは、教会本来のあり方ではない。
4. **私の母教会の例**:私が少年期・青年期に属していたインマヌエル船橋教会では、牧師は伝道と説教に専念し、CSや伝道一般の具体的運営については信徒が主体となって進め、牧師は大

体それを承認し応援するという形で宣教が行われていた。教職・信徒の宣教協力の一つのモデルではなかったかと思う。

6. **協労の為の段階**：教職が懸命に伝道し、信徒が傍観しているという図式ではなく、協労するために以下四つの段階での試みを期待したい：①ヴィジョンの共有：宣教の本質、目標、道筋などの点で聖書がどのように教えているかについて教職・信徒が共に学び、ヴィジョンを共有する：②戦略作りに共同参画：伝道の具体的戦略作りについて、夫々の立場から具体的戦略・方策を出し合い、合意できる点を纏める作業が必要：③実際のなチーム作り：戦略をどの様に実践に移すかについて、役割分担を話し合い、合意する事が大切。④評価の仕組み：一定期間を経て、その戦略がどの程度達成されたかを評価し、必要ならば、新たな方策を考える事も大切

XII. 地域における宣教協力

1. **地域教会の大切さ**：教会の基礎は地域教会である。地域教会は礼拝と交わりと教育と伝道の単位として重要である。しかし地域教会だけが大切という「マイ・チャーチズム」も警戒すべきである。地域教会の自立性と尊厳を重んじつつ、健全な意味における「協会的交わり」と活動を大切にしたい。一個の地域教会で経験できない交わりと広い活動への協力は大切である。
2. **地域に根差した教会**：「教会は地域社会から自己を隔離するのではなく、逆にその奥深くまで根を張っていく様にと召されている。教会は地域社会に遣わされているのであるから、傍観者としてではなく、具体的な関わりの内にこれを生きるのである。…一般的に日本の教会における地域との関わりは伝道活動に限定されてきたように思われる。日本の教会は地域を伝道の場として捉えてきたがそれ以上の関わりを教会の積極的な使命として捉えてこなかったのではないだろうか。東日本大震災の出来事は、教会に地域社会との関係性を見直す様にと迫っている」（篠原基章「宣教の神学から考える神学教育」：福音主義神学第50号、2019年、13頁）
3. **中目黒教会における小さな実験**：「日本の中心地で聖言を真直ぐに伝える」事を目指して、インマヌエル創始者蔦田二雄は、1948年丸の内伝道を始め、都心で働く人々を核として教会員は一都六県に拡大した（名称はインマヌエル丸の内中央教会）。その後、安定した集会所を求めて1973年渋谷区広尾に移転し、名称はインマヌエル主都中央教会。近隣とは多くの課題があり、地域に溶け込みにくい環境であった。竿代は、副牧師として会堂に住み、その苦労を経験した。広尾に移転してから25年後、1998年に竿代がケニアから帰国、主任牧師として赴任した。赴任直後、今後の立地選択の課題に直面、祈りと話し合いの結果、新しい土地での再出発を決定。不思議な摂理で2003年に中目黒駅近くに会堂土地を獲得、新会堂を建設、名称も「インマヌエル中目黒教会」に。「地域重視」を加味し「ミッション・ステートメント」の第5か条：「中目黒の地域社会に対して、物理的にも心理的にも開かれた教会となる事を目指す。地域社会の様々なニーズに対して積極的に応え、より良い地域社会の形成を目指す」、

礼拝堂を3階に据えたが、一階を世との接点とする事を志向して二面ガラス張りの「オアシスホール」として、日中は誰でも何時でも出入り自由の場所(ただのコーヒー付き)として開放。「桜祭り」コンサートを有料とし、その売り上げの半分を自治会の歳末助け合いに献金する事とした。地元の神社のお祭り以外の自治会行事には積極的に参加することにした。特に、会堂北隣の空き地(目黒区所有)の緑地保存運動にオアシスホールを会合の場所として提供するなど貢献した。当該緑地は、2019年、東京音楽大学の本校となった。近隣教会牧師の勧めもあって、竿代は目黒区保護司となり、近隣小・中学校への証の機会も与えられた。オアシスホールで行う「聖書を読む会」等小集会は、近隣に見える形で行い、教会へのアクセスを容易にした。更に手芸教室、押し花アート教室、賛美歌を歌う会等のプレ・エヴァンジェリズムを行い、その中から受洗者も与えられた。会堂が耐震構造であった事もあり防災拠点として認知された。緊急時に近隣の人々を受け入れる為の食糧や水等の備蓄も始めた。2015年、目黒区諸教会と協力して「防災ネットワーク」を立ち上げる為に折々の会合を開くことになった。

4. **地域教会同士の協力**: 日本の諸教会が地域ごとの牧師会、教会同士の協力伝道、地域の行事に共同参加、等の具体的方法で、同じ地域に在る諸教会が協力する事を願っている。①日本の全ての教会が、地域社会の要(コミュニティ・チャーチ)となる事、②そのコミュニティ・チャーチ作りを(日本伝道会議等を通して)日本の教会の宣教戦略として共有する事を願う。